

旅の重さ

素九鬼子

筑摩書房

旅の重さ

素九鬼子



筑摩書房

たび
旅の重さ

昭和四十七年四月三十日 第一刷発行
昭和四十九年六月三十日 第十五刷発行

著者／素九鬼子

発行者／井上達三

発行所／株式会社筑摩書房

東京都千代田区神田小川町二ノ八
電話東京二九一七六五一(代表)
振替東京四一二三郵便番号一〇一一九一

印刷所／暁印刷

製本所／鈴木製本

装幀 朝倉楨

イラスト 素九鬼子

© K. Moto. Printed in Japan 1972

(分類) 0093 (製品) 80084 (出版社) 4604

旅
の
重
さ

われ神に申さん

我を罪ありとしたもう勿れ

何故に我とあらそうかを

我に示したまえ

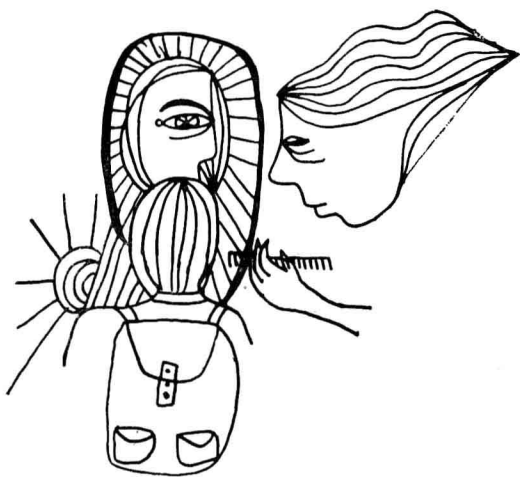
(ヨブ記第十章第二節)

—

ママ、びっくりしないで、泣かないで、落付いてね。そう、わたしは旅にでたの。ただの家出じゃないの、旅にでたのよ。四国遍路のように海辺づたいに四国をぐるりと旅しようと思つてでてきたの。さわがないで。さわがないでね、ママ。いいえ、ママはそんな人ではないわね。ほら、世間の母親がよくやるような、あのヒステリイじみた金切声で学校へ走って行ったりなんか。そうよ、それはよく知ってるのよ。ただね、でもママはどぎまぎして夜も眠れないのじゃないかと思うと気が気じゃないの。けれど、この手紙が着いたらきつと幾分かは落付いてくれるとおもうわ、そうでしょう。

ああ、ママ、旅にでてはや三日になるわ。ああどんなに楽しいことでしょう、蒲団の上に寝ないで、草の上に寝るといふことは。おそらくママも昔はこういう経験があったにちがいないとおもうわ。だってママのような人が、こんなすばらしい味を知らないはずはないでしょうから。

本当はあの朝、ママに一筆書き残して出てくればよかったのね。けれどなぜかそれをするのが面倒だったの。その紙を見るなり、ママが外に飛び出して追っかけて来ないとも限らないと用心をしたことも事実だけれど。あの朝ママは朝早くから外へ出たでしょう。わたしにはわかっていったわ。男のところへ行つたんだってことは。寝ている枕元にクリームのにおいが漂ってきたときびんときたの。だけどそんなことはどうだっていいの。ママが男のところへ行こうが行くまいが、それはママの自由なんですもの。四十女が恋をしてはならぬ理由なんてないんですからね。それにママの恋は、すなわち金に結びつくやつですものね。ありがたいことに、このくらいさいわいなことがあるでしょうか。ママの恋によって、わたしたち二人の生活が成り立っている。——おまえはよいけいなことを口出ししないでくれ——というママの顔が見えるようだよ。おこらないでね。わたしはいつも言うてるようにママが好きよ。皮肉なんか言う気はないの。ただわたしの口の悪さが、すぐにこうなってしまうだけなのよ。ママ、ママを本当に好きよ。旅にでて、ひとりぼっちになってみて、そのことがしみじみわかるの。本当によくわかるの。学校でたくさんの友達がいるけれど、わたしが心から友情を感じたり尊敬ができたり愛したりできる者は、ひとりだっていない。わたしはやっぱりママをたったひとりの友だと思う心が、日増しに強くなってくるの。ママはわたしの母親なんかではない、友だちなんだと



ね。だからなのよ、わたしがママに甘える気にはなれなくても、喧嘩する気にはなるのは。ママは鋭いし寛大だから、わたしの言うことをよくわかってくれるでしょう。

わたしがいなくなった晩、おそらくママはわたしの机の抽斗をひっくり返してみたことでしょう。おあいにくさま。中は殆んど空っぽだったでしょう。ちゃんと整理したの。焼くものは焼くし、捨てるものは捨てたの。とはいっても、大した秘密のものがあつたわけじゃないわ。男の子から貰った貧相な恋文が五六通に、春画のようなもの四五枚に——これはママのハンドバッグから昔盗んだものだけだ——、数学の百点の試験が三枚に、ほかはがらくたよ。ひからびた昆虫や虫めが

ねや、こわれたおもちゃの写真機、ニセのルビーの指輪、貝で作った宝船、いろんな色の消しゴムなど。これらのがらくたは、みんなママが夜店で買ってくれたものだよ。ああ、なぜ捨ててしまったんでしょう。あのままにしておけばよかったのに！

けれど抽斗の中に小さなノートがみつかったでしょう。そうなの。あれはね、わざとあのまま残しておいたの。ママが読んでくれるということがわかっていたから。それにあのノートは、もう頁が字で黒くふさがっているから、この旅に持ってくる必要もなかったの。新しいノートを一冊買ったから。わたしはあの汚れたノートの中に書きこんである字を覚えてるわ。あの下手糞な丸いわざとすましこんだ字を覚えてるわ。一字一字に思い出があるの。わたしはあのノートに字をやたら不経済になんか使わなかったから。

ママ、昨夜もおそらく寢床の中で、ママはあのノートを一枚一枚めくってみたにちがいないわね。そしてぶつぶつ一人言をいっていたんではないの。凶星でしょう。そんなことはわかっているの。離れていても、ママがどうしているかくらいのがわからないでどうでしょう。

ママがあれを読んでくれた以上、もうここでくどくど旅の動機を書く必要もないわね。ただひとつ、旅にでる二日前に書きしるした詩のようなものを、そうよ、いちばん最後の頁の——をもう一度読んでみて。そうしたら、わたしがどのくらいいるしんでいたか、どのくらい異常

な幻影に小突き廻されていたか、そのところがわかってくれるでしょう。

骸骨

ある日 わたしはじぶんの骸骨と対座していた

骸骨はしじゅう無言であつたが

洞穴のような暗い目の奥から

たえずほのかな笑みを送ってきた

白い骨の関節がきしんで

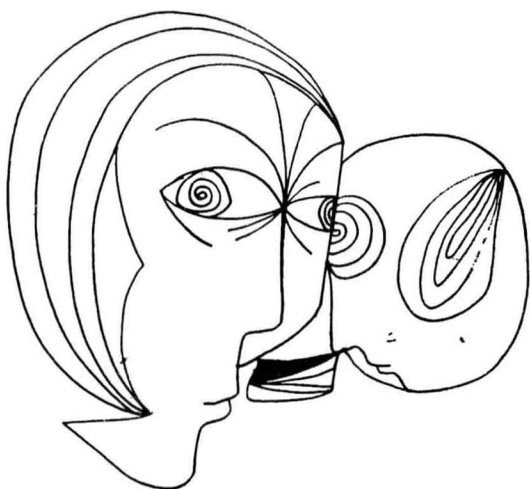
骸骨はわたしの手を撫でてくれた

一字一句まちがってないでしょう。よく覚えているの。わたしはね、これを書いた後で急に旅にでることを考えはじめたの。もうどうにもならなくなったの。わたしの体の中には、この骸骨がきしんでばかりいるのよ。夜中だろうと学校だろうと、両手で耳をきっちり押さえていなければならぬくらいだったの。もうこうなつては大して考えめぐらす必要もないと思つたの。旅にさえでてしまえば、一切の解決がつくような気がしたの。すがすがしい空気が、見知ら

ぬ土地。これこそが今のじぶんの薬だと思ったの。

けれどもね、ママの泣言を聞くのは真平だったわ。そりゃあママだって、わたしが筋道をたてて話せばなんとか話に乗ってくれたでしょう。でもその筋道を立てて話をするということくらい、わたしの苦手なことはないんですものね。お互が喧嘩をして腹を立てないですますには、こうやって先ず行動を起すよりなかったの。そう考えて、夜のあいだにリクサクや運動靴や合羽などを用意したの。そう、ママはあの夜も帰りが遅かったわね。だからゆっくりできたわ、旅仕度が。もんだいは、いくらかの路銀だったわ。いくら四国遍路のような旅をするといったら、多少の金はいるでしょう。もしか病気にでもなった時、それを考えたの。それから野宿場所をみつけれない時には宿に泊らなければならぬし。そこで、ママの簞笥を小さがししたの。古いハンドバッグから九千円でできたわ。半額だけは戻しておこうかと、しばらく思案したけれど、結局全額ポケットに入れてしまったの。ハンドバッグは、わざと乱暴に開いたままにして、ぶら下った着物と着物の間に吊しておいたの。ママが、盗人にやられたんではなく娘にやられたんだということが一目でわかるように。

あのお金は、ママが一週間前に男から貰ったものだってことはわかってるの。それにしても、今度の男はしけるのね。あまりサービスすることはないわ。それにあの男は、ママという人



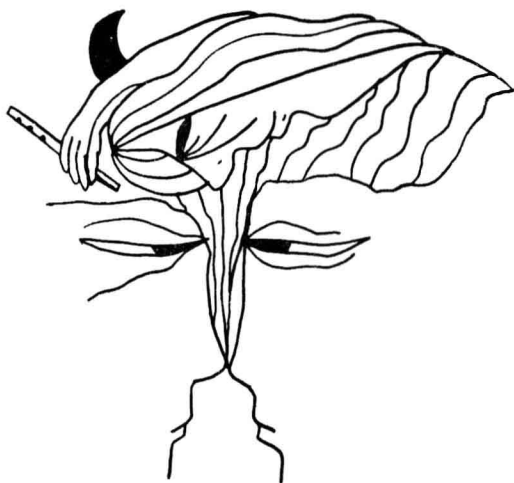
間をちっともわかっていないんだから。以前の男にくらべると、年が若くて男前がすこしよいというだけのことじゃないの。

ママ、わたし盗んだお金をポケットの中でくしゃくしゃにしながら、ママの鏡にじぶんの姿を映してみたの。ほっそりしていて本当にきれいな体をしているよ、おまえさん、すこし色はくろいけれど、というママのいつもの台詞をおもいだして笑ったわ。でもね、鏡の中のわたしの頬は、不思議なほどに赤くて、普段よりもずっときれいな顔だったわ。もしママがあわたしの顔をみつけたら、黙ってはいないでしょうよ。あれ、まあ、この子は何んて美人なんだろう！ そういつて、つい今しがたまで男と寝ていたにおいをぶんぶん

そこらに漂わせて、腕組みしてわたしを眺めるにちがいないとおもったわ。ママのそういう時の魅力的な怪しい姿や声を、わたしはどうかした拍子によく想像できるの。そして、ママ！
ママ！とおもうの。

まさか、ママはわたしがお金を盗んだためにごきげんをとってるなどとは思わないわね。いえ、世間の母親ならばそうくるわ。そこへゆくと、うちのママは、あんな世間の女のように色あせたヒステリーの化物とは違うんだってことは、とにかくわたしが一番よく知っているんだけれど。

もう学校からママのところへ通知がきたかしら。ひょっとするとまだかもしれない。これまでもよくママに黙って学校をずるけていたことがあったから。けれども四五日もしたら、きつとママのところへ直接先生が来るわ。あの老いぼれがやってくるわ。足をひきずるようにわざと歩いてくるわよ。そして、どうしてこう長いこと欠席しているのかときくでしょう。するとママは答えるでしょうね。ちょっと土佐の親類に不幸があつて、娘を代りにやりましたとか何とか。こうなってくると、わたしなんかよりもずっとママの方が才能があるんだから。先生は疑い深そうに、いかにもけがらわしそうにママを見凝めるわよ。ママはそんな目にはびくともしやしないわね。ママの癖のあのパチパチする目で相手を見返すと、相手は五秒とママを



見てられないわね。そういうことで、ママ
があしらっておいでくれるわね。今はちやう
ど夏休み前の試験だけれど、それがどうした
っていうの。試験試験って目の色を変えてい
る連中くらい子供じみているのはないわ。要
するに試験さえよければすべてよしという連
中には、わたしのこの行動は氣違いとしか映
らないでしょう。だからくどくど説明したり
することはちつともないのよ。始めから嘘を
ついて相手にしなければいいのよ。その嘘が
剥げたら剥げた時のことよ。ねえママ、その
時にはその時で、ママも一緒に考えてくれる
わね。

それにね、わたしもう学校なんかに戻りた
くないの。やめたいの。やっとこのあいだ高

校に入学したばかりだけれど。おまけに進学コースなんかに入って、夕方まで学校に残っていたりしたけれど。考えれば考えるほど時間の無駄だと思うのよ。学校生活というものが、少くともわたしにとってはね。だからね、わたし学校をやめてママと一緒に家に居て何かするわ。それは旅が終ってから考えることにしましょう。

ママ、今ね、海辺に坐っているの。瀬戸内海の柔い波音がとてもいいわ。もやもやしている心に打ち寄せてくるこの波音は、ちょうど錆びた幾千という鈴が遠くの方で鳴っているような感じです。空は真青だし、潮風は吹くし、振り向くと四国山脈の峰は、くっきりと連なっていてひかえているの。遠くの村から夏祭のお囃子の稽古の音も流れてくるわ。今夜はこの近辺で野宿をするつもりなの。どこか寝心地のよい場所をこれからさがすの。夏草のきついにおい、ママもしててでしよう。夜中にふとそのにおいにむせて目が覚めることがあるの。そのときほどわたしは満された気持になることはないわ。こおろぎや鈴虫や松虫や蟻や蛇も、わたしは決して殺したりしないの。いかに顔の上に這い上ってきたり、背中にこそそそ忍びこんだりしたって。さてこの手紙をあのお囃子のきこえてくる村のポストまで入れに行きましよう。ここから大して遠くもなさそう。田んぼの中の一本路をまっすぐ行けばいいらしいわ。あの村で食べる物を少し買うつもりよ。パンとキュウリとトマトくらいをね。キュウリとトマトは川で洗って塩

で食べるの。パンにはマーガリンを塗って食べるの。マーガリンは暑さでべとべとだけけど、ビニールでくるのであるから大丈夫。昨日は百姓がトマトをただで呉れたの。おそらくわたしを遍路とまちがえたのよ。麦藁帽を目深かに被っていたから人相がよくわからなかったのよ。それにね、真白なトレーニングパンツをはいていることで、とても得してるの。全く灰色のもうひとつのズボンなんかはいてこなくてよかったわ。この白のズボンは、一見遍路の白装束に混同され易いという利点があるのよ。

じゃ、ママ、また書くわ。ママからは手紙を貰えないけど。そのうちにママだってだんだんわたしの手紙がおもしろくなってくるわよ。

追伸

行水をした後は、風邪をひかないよう早く着物を着ること。

二

水源池小屋というのは、旅人にとってころあいの野宿場所です。田植時ならば百姓たちが田

に引く水を心配してこの小屋に出入りをするけれど、今は殆んど野に放ったらかしにしているの。わたしはこの小屋に目をつけたわ。こういう小屋は至るところの田んぼの中に、ぼつんばつんと建っているの。錆びたポンプの機械や深い草の生えた井戸や、くずれ落ちた壁や、杉皮のむけた屋根。ママ、わたしは今日で三晩もこんな小屋に野宿しているのよ。

夜中に目が覚めたら、杉皮の破れ目からちようど月が見えたわ。朱い大きな月でね、まるで大きなミカンのようだった。耳を澄ますとね、山の音、地の音、海の音などが聞えるのよ。これこそ野宿をする者にだけ聞える自然の寝言なのよ。わたしがこう言うと、ママはにやりとして、ふんふんとうなずくでしょう。いつかママは、絵に音をだしたいと言っていたわね。ママも一度こうやって野宿を試してみるといいわ。きっと新しいものが描けますよ。夜の音があるなんて、わたしはこれまでに一度だって考えてみたことはなかったわ。夜汽車の汽笛や、夜鳴く鳥や虫の声なんかではないのよ。山や海や地が夜になるとそれぞれの音をだすの。本来にその音がきこえるの。嘘ではないの。起きだして、くずれた壁の穴に目をあてて、蒼白い夜の野をじいっと眺め渡していると、ひとつの唸りのようなそれらの音がきこえてくるの。更に耳を澄ましてじいっとしていると、それらのひとつひとつの異った音というものがわかってくるの。けれどその音をここで説明することは非常にむずかしいわ。その音色の識別には、魂の冴えと